

法、穿孔技法の発展によって特徴づけられる文化相を想定した。これらの技法は有段石斧を生み、硬玉ないし軟玉製の利器や装身具を発達させた。ルソン島中央部バタンガス地域出土の硬玉ないし軟玉製の有孔斧、腕輪、珧状石輪、錐、鏝などは後期新石器文化の特徴的な遺物である。またこの時期にインドシナ半島方面の青銅器文化がルソン島に波及していたことを、バタンガス地域出土の青銅製袋状斧及び槍先などを例示して言及している。

一方、フィリピンの新石器時代には土器は登場していないとし、土器の製法は鉄器時代に南方より移住してきたマレー系の人達によって鉄器の精錬と鍛冶の技術、紡織の技術、ガラスの加工技術などと共に伝えられ、新文化即ち鉄器時代の文化が形成されたと想定した。

さて1950年以後Beyerの研究成果を受け継いだ多くの研究者達、例えば、W.G.Solheim II, R.B.Fox, A.E.EvangelistaらはBeyer説を検討すべく調査活動を開始しBeyerの編年体系に対してより科学的な裏付けもなされた反面、新たな見解も提示されるようになった。特にパラワン島におけるタボン洞穴群の組織的な発掘調査はこの地域における先史時代文化の流れに関して有力なる資料を提供した。特に甕棺複合に関連する遺物の出土状況は新石器時代から鉄器時代に至る流れの一面を明らかにしている。タボン洞穴群遺跡の調査者であるFoxは新石器時代を二期に区分し、土器の登場を以て後期新石器時代とし、金属器時代を初期と発展期に分け、鉄器文化の時代を発展期の金属器時代とし、青銅器が製作使用された時期を初期金属器時代と想定した。

今回はタボン洞穴群遺跡の甕棺複合に関連する遺物を具体的に紹介し、この地域における青銅器の出現前後の様相を検討してみたい。

## 問 題 提 起

永 積 昭

本年大会には、恒例のシンポジウムのテーマとして、昨年の「植民地支配と東南アジアの経済的社会的変容（19世紀を中心として）」に続く時代を予定し、最初は「前期民族主義」というテーマが話題に上っていた。しかし、丁度適当な発表者達が日本を離れている等の理由で、このテーマは後日に譲ることとなり、結局プログラムにある通り、「民族国家形成期の東南アジアとその植民地化」ということに決定したのである。時代としては昨年度に続く19-20世紀の変わり目を一応の目安としたが、必ずしもそれにこだわらず、1703年から1912年までをカバーする6氏の多彩な発表を期待できることとなった。

1730年にビルマに建設されたコンバウン朝は当時の東南アジアにおいて、現在の民族国家とはほぼ同じ領域を支配する唯一の国家であった様に見える。ヴェトナム黎朝、タイのアユタヤ朝は分裂または衰退し、島嶼部やヤマライ半島にはブギ族の移動が激しく、ジャワにはオランダの、ルソンにはスペインの侵略が進んでいた。1782年のチャクリ朝、1802年の阮朝成立によって、のちのヨーロッパ列強のインパクトを受ける大陸部の国家統一は一段落したわけである。そして全報告の下限である1912年には、タイを除く東南アジア全土は欧米の植民地となり終っていることを思えば、その変容がいかに急速であったかがわかる。

従ってこの過程は重なりつつ同時進行する二つのテーマから成る。東南アジアの権力者は領土を支配せず、人民を支配しており、これが欧米列強の領土蚕食を容易にすると共に、地方のまたは異分子の、中央政府に対する抵抗を招いた。このような抵抗運動の主体は、世俗権力に対する宗教指導者（アチェの場合）、慣習法首長（西スマトラの場合）、村落内統治機構たる文紳層（ヴェトナムの場合）など、状況に応じて多様な変化を見せるのである。

## アラウンパヤーとその競争者たち

鈴木 中正

私は清緬戦争に関する研究を進める過程で清側史料の中にコンバウン朝成立期の事情に関する重要

な記述の存することを発見した。その主なものは礼親王昭榎の嘯亭雜録（巻4）「緬甸帰誠本末」、瀕繫（巻8ノ7）所収「白古外紀」である。これらは史料として高い可信性をもつが文面に現われる人名や地名をビルマ側史料と対比して考証しなければならない。そうした操作をへた結果明らかにされる所によると、コンバウン朝成立の事情は従来説かれた所とは可なり異ったものとなる。

後期トンギー王朝の末期に諸矛盾が深刻化しアワ政権の衰微する中で、1730年代からマニプル人のアワ地区への侵寇が激化し、1740年下ビルマのペゲーに反乱が起り、同じ年上ビルマのマンダレー県のマダヤ地区にも反乱が起り、南北からアワ政権を挟撃し、ペゲーからの進攻軍が1752年アワを占領してトンギー朝を倒した。こゝでアワ西北方のシュエボ村を基地とするアラウンパーのビルマ人勢力が登場し、1753年末アワからペゲー軍を駆逐し新政権を樹立する。

ところでペゲーとマダヤの反乱勢力の実体をみると、前者は宗教反乱で、トンギー王朝の王族の一人を指導者としたが、その支持者の中核をなしたのはペゲー附近に定住し主に農業に従事した華僑であり（モン人の一部も反乱に加わったであろうが）、後者の指導者は明末桂王（永曆帝）に従ってビルマに亡命した明人の子孫宮裡雁で、その支持者は一部のモン人の外、この地方に定住した亡命中国人の子孫及びシャンのセンウイ邦の銀山波竜廠の中国人労働者であった。

清中期の平和な時代にビルマに移住した多数の華僑は商業（主に棉花買付け）や鉱山の採掘に従事したが、比較的強い結束力をもったらしいからアラウンパーに対して恐るべき脅威を与えたが、新興ビルマ人の凄じい精力には抗しえなかったし、清朝政権は国外華僑の政治運動に対しては全く無関心、拒否的であった。

## 第一次英緬戦争（1824-26）の原因をめぐって —ビルマ植民地化の一過程—

渡 辺 佳 成

18世紀末から19世紀前半にかけて膨張しつつあったコンバウン朝は、1785年にはアラカン、1819年にはマニプルを、1821年にはアッサムをそれぞれ征服し、周辺の家国（土侯国）を次次とその支配下に収めていった。これをコンバウン朝初期の対外戦争と比べてみると、一つの大きな違いがそこに存在することがわかる。すなわち、初期においては、征服しても金銀財宝を奪って帰るという一時支配的な略奪戦争であったのに対して、この時期になると、軍隊をそのまま駐屯させ、さらに地方官を派遣して統治させるという永久支配を意図するものに変化していった。しかしながら、こうした政策は、ビルマ族による支配に対するそれぞれの少数民族の抵抗、とりわけ、その支配によって自らの地位・権益を奪われた各土侯層・部族長の抵抗と直面することになる。

こうした土侯層が抵抗の根拠地を隣接する英領インドに置き、さらにはベンガル評議会の援助を求めることによって、イギリス＝ビルマの関係は尖鋭化していくのであった。ベンガル評議会は、当初においては関係修復に努めるが、1820年代以降、インド・ヨーロッパの状況の変化の中で、ビルマ勢力の伸長に脅威を感じると同時に、これを東方進出の絶好の好機としてとらえ、戦争へと突入していくのであった。

本報告では、以上のような経過を英文史料を主として辿りながら、コンバウン王朝の勢力伸長とそれに対する各少数民族の抵抗が如何なるものであったのか、こうした状況にベンガル評議会がどのように対処していったのかを検討し、ビルマにおけるビルマ族と他の少数民族の関係（抗争）というビルマ史において常に念頭に置かなければならない観点から第一次英緬戦争を考えてみたい。

### 「1902年の三つの反バンコク叛乱」

石 井 米 雄

1901年末から翌2年の半ばにかけて、南タイ・マレー系七州、北タイのプレー州、および東北タイのメコン沿岸諸州において叛乱事件（Khabot）が発生した。砲艦の急派と首謀者の逮捕によっ